

## シンポジウム概要

### 【目録の現状と課題：意義を再確認する】

日本目録規則 2018 年版が刊行されてから 6 年がたった。日本目録規則 2018 年版は RDA と相互運用性を担保したものとなっているが、RDA の基盤となる概念モデルの FRBR（書誌レコードの機能要件）は 2017 年、IFLA LRM に統合されるなど、目録を巡っては様々な動きが世界的にも見られる。

当シンポジウムでは、そうした中で、改めて今、図書館界における目録の現状と課題、意義を再確認することを目指す。

より具体的には、木村麻衣子氏から基調講演にてお話いただく予定の、目録についての危機的な現状を踏まえ、橋詰秋子氏からは、著作の典拠データ作成について、その必要性を中心にご発表いただく。続いて渡邊隆弘氏からは、件名標目表の現状と今後について、基本件名標目表（BSH）のあり方や、国立国会図書館件名標目表（NDLSH）と BSH の関係性の観点からご発表いただく。

それらの内容を踏まえ、コーディネーター、パネリスト全員によって、図書館界における目録の現状と課題、意義について、議論を進めていきたい。

### パネリスト（発表予定順 敬称略）

「組織法において「著作」とは何か、なぜ重視されているのか」

橋詰 秋子（はしづめ あきこ）

実践女子大学文学部准教授。慶應義塾大学文学研究科図書館・情報学専攻修了（博士（図書館・情報学））。国立国会図書館勤務を経て現職。日本図書館協会目録委員。専門は情報資源組織化、メタデータ。編著書に『図書館情報学事典』（共著、第 3 部門の編集及び事典項目執筆「著作」「関連の記録」、丸善出版、2023）ほか。

「件名標目表の現状とこれから」

渡邊 隆弘（わたなべ たかひろ）

帝塚山学院大学教授。京都大学文学部卒業、大阪教育大学教育学研究科修了。神戸大学附属図書館を経て、現勤務先。専門は、情報組織化。1995 年より日本図書館協会件名標目委員、2006 年より同目録委員。著書に『三訂情報資源組織論』（共著、樹村房、2019）など。

木村 麻衣子 (きむら まいこ)

日本女子大学文学部日本文学科准教授，博士（図書館・情報学，慶應義塾大学，2015）。2006年から6年間の慶應義塾大学メディアセンター（図書館）勤務，日本学術振興会特別研究員（RPD，東京大学東洋文化研究所），慶應義塾大学文学部助教（有期）などを経て現職。図書館員時代のうち3年半ほどは，AACR2とMARC21に準拠して和洋書と中国書の書誌データを作成していた。日本図書館協会目録委員，ISO/TC46/SC4国内審議委員会主査。編著書に『「日本目録規則2018年版」入門』（日本図書館協会，2022）がある。

#### コーディネーター

今野 創祐 (いまの そうすけ)

東京学芸大学特任講師。同志社大学大学院総合政策科学研究科図書館情報学コース博士前期課程修了。出版社勤務，中学校・高等学校の国語科・社会科教員，京都大学図書系職員を経て現職。専門は図書館情報学。2017年9月から日本図書館研究会情報組織化研究グループ運営委員（2019年4月から同世話人）。著書に『図書館人物事典』（共著，日外アソシエーツ，2017）ほか。